

戦後50年・戦争体験手記

○ あの日、あの時のことを…

戦争、私は死にたくない
相手だつて同じこと今井 丈男
(朝旦)

今井さんは、昭和十二年十一月、杭州湾無血上陸部隊の一員として支那（現在の中国）に渡り、終戦後一年近くにわたり湖口（浙江省）で抑留生活を送りました。十年程前から戦争体験文を書いているそうで、「戦争で体験したことを文に残して、伝えていくのが私の役目です」としみじみ話しています。

戦争といえば命のことが頭に浮かぶ。戦争には「悪」ともいわれているものがある。それは火付け、強盗、人殺し、その中でも取り返しのつかないものは人殺し。殺さねば殺される。これは戦場においての掟です。私も人を殺さねばならないこともあった。

野戦電信隊の架線作業隊、これに軽機関銃を持って自動車警乗兵として参加した。道という路は壊され、車の運行には難儀をした。この日の道はまるで泥の海、横の小山から松の木を切ってきて、横並べにしての運転、夜明けから日没まで運転してもたったの五キロ位。やつと辿り着いた小さな城壁のある町に宿営する。夜八時ごろ銃声、「オヤ、敵襲だぞ。応戦だ、軽機（軽機関銃）ですぐ射て、小銃はそう弾がない、肉迫するまで射つな」。城壁の裂目から軽機を射つ場所を変えて、一丁の軽機関銃を何丁にも見せる。相手は正規の軍隊ではない土民軍だ。車の物資が狙いなのだ。敵は二時間位で後退した。大陸の夜明けは早い、城壁の上に立つてみる。前方に黒いのが一つ転がって見える。近くに行ってみたら死体だ、その先にもう一つ。私も遂に人を殺した。後味の良いいものではなかったものでした。二度目に応召して仙台で留守隊勤務中、米英とも戦禍を交えるようになり、生きるには中支那の戦場よりほかなしと志願し

て古戦場に参りました。そこは戦争も長引き、死傷者も増えるばかり。私連も戦争はもう飽き飽き、そして死にたくない、でも殺さねば殺されるのが戦争です。

追撃戦の時でした。明らかに自分の狙った弾で二人の中国兵を殺した。ああ嫌だ、自分が死にたくないことは相手と同じ、自分が危ない時以外、相手を殺すまい。そして部下にこう言っていた。「どうしても射たねばならない時は、足を狙え。足なら死ななくてすむ」「分隊長さんにならうまいかないよ」。それでも下から狙えました。私の知っている限りでも四人の兵を殺した。戦争でもなかったら大罪人だ。私が弱虫だからかもしれないが、けつて心良いものでありませんでした。戦後五十年、今に「一度胸試しだ、何の」と言っていて、「残虐行為は命令だ、仕方がなかったんだ」とか人事のせいにして得々として話している人もあると聞きました。厳に慎まねばと思っっています。

(注)
①土民軍、その土地に住む人たちが、敵から身を守るために組織したものをいう。
②アイヨイ、アイヨイ 中国の人たちが哀願するときに使う言葉で、「助けてくれ」といった意味を持つ。



戦死者の慰霊祭(昭和19年)

ひどい目に遭った

土田 文治(下新)



土田さんは、昭和十六年北支那（現在の中国）派遣隊第二九三部隊の「人」として戦地へ行き、昭和十九年五月に焼いた頭部を負傷してしまいました。

「とにかくひどい目に遭った。教壇に立つて子どもたちに授業を教えたかったが、けがをしてだめになった。くやしいですよ」と話す土田さん。現在自宅にある掛け軸の「つ」は、戦後の混乱期における土田さんの気持ちを表した言葉が、恩師・故吉川先生によって書かれてあります。

「再建日本の道を辿らる」※土田さんからは、写真を送っていただきました。



△出征当日、家族に見送られる土田さん(昭和16年)



△陣部隊のころの土田さん(昭和17年)



△白根の芸者達が激励に訪れて



△陣部隊事務局の様子

お買物、ご用命は市内で

お買物、ご用命は市内で

今年もステキに七五三

好きな衣装を選んで下さい！
—— 撮影用衣装代無料 ——

3才用…着物(被布・振袖・袴)・ドレス
5才用…着物(羽織・袴・かみしも)・タキシード
7才用…着物(振袖・袴)・ドレス

大切なお写真はプロの手で

PHOTO STUDIO
スタジオ
サカヅメ

写真科職業訓練指導員
1級写真技能士

新津市本町4丁目16-30 ●営業時間AM9:00～PM7:00 ●定休日 水曜日



寿司処 華は舞

新津駅前通り

出前予約

☎23-5758

●華舞コース PM8:00まで

2,000円より

補聴器や聴こえてお悩みの方へ

新津市本町2番館(旧市役所)
2階和室会議室
毎週水曜日 午前10時～10時半

聴力の適合測定、修理、点検、装用相談
リオネット新潟 ☎025(224)2228 出張可